

## はじめに

### 政治思想史に 意味があるのか

本書は古代ギリシアにおけるデモクラシーの誕生から、自由主義や社会主義といった「——主義」（難しくいえば「イデオロギー」です）の諸思想が展開した19世紀までを対象とする政治思想史の教科書です（20世紀も少しだけ扱います）。

政治思想史という以上、本の構成は歴史的順序に沿っています。つまり古い時代の話から始まって、読み進むにつれて新しい時代の話になっていきます。基本的には一人一人の思想家やその著作を対象としているので、最初から読んでいけば、大学の「西洋政治思想史」講義で扱われるような重要思想家について、一通り概観できるはずです。

とはいえ、いろいろな思想を歴史順に紹介することに、どれほどの意味があるのでしょうか。あるいは、みなさんは次のように思われるかもしれません。

「政治思想家というのは、政治について根源的な考察を行い、何かしらの政治的「真理」を発見した人のはずだ。しかし、「真理」というのは本来、歴史を超えて妥当するものではないか。そうだとしたら、ある時代に「真理」だったものが、別の時代には「真理」でなくなるということがあるのだろうか。もしそんなことがあるとすれば、それはそもそも「真理」ではなかったのだ」

このような考え方には、たしかに一理あります。実際、本書で扱う思想家の中にも、そのように考えた人がいます。政治をめぐる「真理」は数学的な真理と同じように、いついかなるときでも一義的に証明できるものであり、政治に残された課題はそれをいかに実

現するかだけである、というのです。

そうだとすれば、多様な政治思想家の考えを歴史順に検討していく本書など、まさに無用なものでしょう。「こんな考えもある、あんな考えもある」とただ説明されても、話がこんがらがってきて、読者は迷うばかりだからです。

これに対し、政治をめぐる本質的な事柄（真理）というのは、数学的証明のようなものではない、という考えもあります。政治は、具体的な時代状況や、社会背景があってはじめて意味をもちます。それゆえ、具体的な歴史の展開を抜きにして、政治を語ることなど不可能だと主張した思想家もいるのです。

さらにいえば、およそ人間や社会をめぐる真理は、歴史の過程を通じて実現すると主張したヘーゲル（☞第8章）のような思想家もいます。それぞれの時代の個人や集団は、目の前の課題をこなすだけで精一杯です。しかしながら、後から振り返れば、それぞれの行いは、必ず歴史的な意味をもっています。ヘーゲルが「ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ」といったように、後になって意味がわかることもあるのです。

「自由」の発展  
としての歴史？

そのような意味でいえば、「政治思想史」という科目のあり方自体が、どちらかといえば、ヘーゲル的な思考法に近いのかもしれませんが。とはいえ、現代において、ヘーゲル的な歴史観が大きな挑戦にさらされていることも事実です。

たとえばヘーゲルは、人類の歴史を自由の発展としてとらえました。歴史を遡れば、一人の皇帝だけが自由で、あとの人は奴隷でしかない社会もあったでしょう。これに対し、古代ギリシアの都市国家（ポリスと呼ばれました）のように、その都市国家の市民の子として生まれたすべての成人男性に、等しく自由を認めた社会もあり

ました（一方、女性や奴隷には市民の資格が認められませんでした）。これを受けて、すべての人間の等しい自由の実現が、その後の歴史の課題となったというわけです。

このようにヘーゲルの場合は「自由」がキーワードでしたが、同じように、歴史とは「デモクラシー」が実現していく過程だ、という理解もありうるでしょう（ここで「自由」とは何か、「デモクラシー」とは何かという疑問をもたれる方もいるでしょう。グッド・クエスチョンですが、それに答えるには、この本の全体を読んでもらう必要があります。もう少しだけガマンしてください）。

さらにいえば、人間の理性が開花する過程、経済活動や産業が発展する過程として、人類の歴史を理解する人もいました（今もいるでしょう）。いずれにせよ、共通しているのは、「歴史とは、——が実現していく過程だ」という発想です。この「——」には何を入れてもかまいません。ともかく、歴史には何か、実現されるべき目標、あるいは理念のようなものがあるというわけです。

しかしながら、歴史とはそういうものなのか、という疑問も当然にありえます。つまり、歴史というのは、本当に一つの目標や理念をもった「物語」として語ることができるのか、あらためて考える必要があります。

「物語」を作ろうとすれば、当然、シナリオとキャスティングが大切です。話の筋が見えないと、読者は困ってしまいます。したがって、主要なストーリーラインにのらない話は、できるだけ除いておいた方がいいでしょう。だれが主人公で、だれが敵役で、だれが脇役かも考えないといけません。配役には限りがあるので、エキストラにさえなれない人も出てくるでしょう。しかし、人類の歴史というのは、本当にそういうものなのでしょうか。

そもそも「自由」や「デモクラシー」といった理念が、かつては

どは輝きをもたなくなっていることが問題なのかもしれません。「歴史とはデモクラシーが実現する過程なのだ」といっても、「デモクラシーって、そんなにいいものなのか」「デモクラシーなんて、あまりピンとこない」という人が増えているのです。

ヘーゲルのように、人類の歴史を一つの目標や理念へと向かう壮大な「物語」として描くことには、どうも抵抗がある。このような感覚こそが、現代という時代の一つの特徴なのです。

「グローバル・ヒ  
ストリー」時代  
の政治思想史

ヘーゲル的な歴史観には別の問題もあります。先ほどキャストイングといいましたが、人類の歴史にはその時代ごとに主役となる個人や民族がいるとヘーゲルは考えていました。

先ほどの「自由」の話でいえば、一人だけが自由だった時代の主役が「<sup>オリエンタル</sup>東洋的な」帝国であったとすれば、少数者が自由である時代を切り開いたのは古代ギリシアであり、その後、古代ギリシアの文明を継承したヨーロッパが歴史の主役になった、というわけです。

このようなヘーゲルの配役には、現代ではあちこちから批判の声があがっています。まず「<sup>オリエンタル</sup>東洋的」という概念ですが、「<sup>オリエンタル・  
デスポティズム</sup>東洋的専制」などという言葉がしばしば使われるように、「東洋」=専制、「西洋」=自由という二項対立的な考え方が、ここでは前提にされています。しかしながら、そもそも「東洋的」とは何かということを含めて、現在ではこのような理解に対しては批判が多数寄せられています。

また、古代ギリシアの文明がヨーロッパに継承され、そのヨーロッパが人類史の主役となったという歴史観に対しても、「ちょっと待って」という声が多くありません。

もちろん古代ギリシアやローマの文明が、その後の人類の歴史に大きな影響を与えたことは間違いありません。とはいえ、このよう

な古代文明を継承したという視点からいえば、重要なのはむしろイスラム圏のはずです。ヨーロッパはかなり後の時代になって、イスラム圏から古代文明を学び直したことは間違いありません。この点が、ヘーゲルの歴史観からはすっぽりと抜け落ちているのです。

中国文明の理解についても問題があります。現在の歴史研究が明らかにしているように、近代ヨーロッパは中国からの影響を受け続けました。にもかかわらず、ヘーゲルの歴史観においては、中国文明は「東洋の帝国」とひとくくりにされるだけです。

現在、「グローバル・ヒストリー」ということがよくいわれます。これまで「歴史」というと、現在の国境を枠組みにして編集された各国史が一般的でしたが、そのような枠を取り払ってみる必要があるのではないかというのです。古代ギリシアを直線的に近代ヨーロッパと結び付けて、これを歴史の本<sup>メインストリーム</sup>流とする歴史観も見直しの対象です。

政治思想史もまた、見直しを免れません。これまでの政治思想史研究が、ヨーロッパ中心史観の影響の下に発展してきたことは事実です。はたして、21世紀にふさわしい政治思想史は可能なのでしょうか。

「政治的人文主義」と  
「共和主義」

本書は、以上のような時代の要請に応えることを課題として編まれています。もちろん、容易な課題ではありません。本当の意味での「21世紀の政治思想史」は、まだまだこれからといわざるをえません。

本書では以下のような方針を採用しています。

第一の方針は、現在の政治思想史研究で活発に論じられている「政治的人文主義」や「共和主義」という考え方を導入することです。それぞれの概念については、後ほど詳しく論じることになります

が、重要なのは読むことの重視です。

政治思想史においては、「古典」と呼ばれる一連の書物があります。この場合の「古典」とは、単に「古い本」という意味ではありません。そうではなく、「時代を超えて読み継がれ、つねに参照され続けた書物」こそが、真の意味での「古典」です。

この意味でいえば、政治思想史とは、「古典」が読み継がれてきた歴史です。本書で扱うどの思想家も、自分なりに「古典」を選び、それを深く読み込むことで自らの思想を形成しました。いわば、「古典」を読み、そこで得られた視座や思考法をもって、自らの目の前にある現実に取り組もうとしたのです。そしてそのような彼ら、彼女らの著作が新たな「古典」となっていました。

「人文主義」とは本来、このような「古典」を読み解く知的営みの伝統を指しますが、「シヴィック・ヒューマニズム政治的人文主義」とはとくに政治に焦点を置くものです。そこでは、すでに指摘したように、古代ギリシアやローマがきわめて重要な位置を占めました。

この場合、「自由」や「デモクラシー」といった概念を生み出した古代ギリシアが重視されるのはもちろんですが、ローマの重要性もこれに劣りません。とくに共和政時代（後ほど詳述します）のローマがもった権威には巨大なものがあり、そこで強調された「公共の利益」という理念を継承する知的潮流は、しばしば「共和主義」と呼ばれます。

現在、「政治的人文主義」や「共和主義」に関して、多くの研究書が公刊されており、本書はその成果をなるべく取り込むようにしています。その理由は、政治思想史を直ちに「自由」や「デモクラシー」の発展の歴史として決め付けるのではなく、むしろ具体的な「古典」がいかに読み継がれてきたかを重視するためです。

## ヨーロッパの「地域性」

第二の方針は、すでに述べたように、グローバル・ヒストリーの時代にふさわしい政治思想史を構想することです。とはいえ、目次を見ていただければわかるように、本書の叙述もまた古代ギリシアから始まっており、中世ヨーロッパを経て、近代ヨーロッパへと向かいます（アメリカも扱います）。「どこが新しいのか！」とお叱りを受けることも覚悟しています。

しかし、このことは古代ギリシアから近代ヨーロッパへの発展を直線的にとらえ、これを直ちに普遍的なものとみなす発展史観をそのまま継承したことを意味しません。むしろ本書では、ヨーロッパ社会のもつ歴史的な個性に着目しようと思っています。もうちょっと強い言葉でいえば、ヨーロッパの「地域性」を重視しようというのです。

というのも、ヨーロッパの歴史を振り返ると、とても興味深い、世界の他の地域には見られない特徴をもっていることに気づくからです。一例をあげれば、「ヨーロッパ」の一体性です。現在もヨーロッパ連合（EU）の拡大が進行中であり、どこまでが「ヨーロッパ」かについては、つねに議論があります。それでも、「ヨーロッパ」という地域があり、そこに歴史的・文化的な一体性が存在することを疑う人は多くないでしょう。

しかしながら、実をいえば「ヨーロッパ」の歴史を見ても、きわめて短い例外の時期を除けば、政治的な統一が存在したことはほとんどありません。現在、「ヨーロッパ」と呼ばれているのは、かつてのローマ帝国の版図の一部ですが、この範囲を政治的に統一する権力は二度と現れませんでした。代わりに、この地域の一体性を守ってきたのは、長らくカトリック教会でした。

世俗の権力とは別個に宗教組織が発展し、両者の関係がきわめて

緊張に満ちていたのが、ヨーロッパの特徴です。この特徴は、そこに生まれた「政教分離」という原則とも密接に結び付いています（それゆえに、現在でもイスラム圏を中心に、この原則に反対する動きがあります）。

本書を通じて明らかにしたいのは、きわめて歴史的な個性をもち、その限りで「地域性」をもつヨーロッパが生み出した政治的理念のうち、何が、どこまでの「普遍性」をもちうるか、ということなのです。

ヨーロッパで起きたことや、そこで生まれた理念が直ちに普遍的な意味をもつとは限りません。それでも 21 世紀のグローバル社会において、近代ヨーロッパの政治思想は依然として、人類にとって最も一般性のある枠組みを提供してくれるものではないでしょうか。本書の前提にあるのは、このような考え方です。

#### 政治哲学との架橋

最後に第三の方針として、政治思想史と政治哲学との架橋をあげておきたいと思えます。ここで政治哲学とは何か、政治思想史とは何かについて、紙幅の関係もあって、長々と述べることはできません。

しかしながら、ここまで論じてきたことからわかるように、政治思想史の伝統において大切だったのは、過去の古典を読み、そこで得られた視座や思考法をもって、自らの目の前にある現実に取り組むことでした。そうである以上、政治思想史研究が、現代社会における政治のあり方についての哲学的考察と結び付くのは当然のことです。

ただし、政治思想史と政治哲学とが全く同じものであるわけではありません。政治思想史には政治思想史の、政治哲学には政治哲学の、固有の思考法があることは間違いありません。両者を安易に結び付けることには慎重であるべきでしょう。



少なくとも、政治思想史研究においては、古典となる文献のテキストの精密な読解と、その古典が書かれた時代状況や社会背景の理解が不可欠です。このことを抜きに、古典で読んだことを直ちに、自分の目の前の現実アナクロニズムに適用すれば時代錯誤の批判を免れません。

これに対し、政治哲学研究においては、現実の政治的課題に対し、哲学的基礎をもった解答を示すことが重視されます。その場合、現実を読み解く何らかの概念が必要ですが、多くの場合、その概念は政治思想史研究から導入されます。とはいえ、経済学を含め、他のいかなる専門分野からであっても有効な概念さえ見つかればいいわけです。

このように、政治思想史と政治哲学とは、直ちに一体であるとはいえませんが、両者がばらばらに展開されるのも生産的ではありません。本書では、現代政治哲学で論じられる多くのテーマや概念が、政治思想史の中でどのように生まれ、また変化してきたかを探るつもりです。また、とくに Keyword として、現代の政治哲学でも強調される諸概念について解説しています。したがって、政治哲学を勉強する方にとっても、本書は有益な示唆を与えるはずです。

現代を生きる人間にとって、政治思想史は尽きることのない知の源泉です。魅惑的な古典の世界へとみなさんをご案内することが、本書の何よりの願いなのです。

はじめに…………… i  
 政治思想史に意味があるのか i 「自由」の発展としての歴史？ ii 「グローバル・ヒストリー」時代の政治思想史 iv 「政治的人文主義」と「共和主義」 v ヨーロッパの「地域性」 vii 政治哲学との架橋 viii

**第1章 古代ギリシアの政治思想** I

**1** 古代ギリシアにおける政治と哲学…………… 2  
 ポリスの誕生 2 デモクラシーの成立 3 自由・正義・法 5 デモクラシーと哲学 6  
**2** プラトン…………… 8  
 法は絶対か 8 ソクラテスの登場 9 『ゴルギアス』と『国家』 11 イデアと哲人王 14  
**3** アリストテレス…………… 15  
 形而上学 15 学問の体系 17 ポリス世界と『政治学』 19 政体論 21

**第2章 ローマの政治思想** 23

**1** ヘレニズムとローマ…………… 24  
 ポリス世界の黄昏 24 共和政ローマの発展 25 ポリユビオスの混合政体論 27 ギリシアとローマの違い 29  
**2** 帝政ローマの政治思想…………… 31  
 帝政への移行 31 キケロ 32 タキトゥス 35 セ

	ネカ	36
<b>3</b>	キリスト教の誕生	38
	ユダヤ教という起源	38
	イエスの出現	39
	パウロ	41
	初期キリスト教徒の共同体	43
<b>4</b>	アウグスティヌス	45
	論争の生涯	45
	神の国と地の国	47
	自由意志と悪	48
	キリスト教における時間	50

### 第3章 中世ヨーロッパの政治思想 53

<b>1</b>	ヨーロッパ世界の成立	54
	古代—中世—近代?	54
	カロリング・ルネサンス	55
	封建社会と法	57
	両剣論	59
<b>2</b>	12世紀ルネサンスとスコラ哲学	61
	12世紀ルネサンス	61
	シャルトル学派とソールズベリのジョン	62
	スコラ哲学	64
	トマス・アクィナス	65
<b>3</b>	普遍論争と中世世界の解体	68
	普遍論争	68
	普遍的共同体の解体	69
	王権の発展と団体・代表理論	70
	ダンテとパドヴァのマルシリウス	72

### 第4章 ルネサンスと宗教改革 75

<b>1</b>	マキアヴェリ	76
	イタリア都市国家の発展	76
	マキアヴェリとその時代	77
	『君主論』	79
	『リウヴィウス論』	81
<b>2</b>	宗教改革	83
	宗教改革とは	83
	ルター	84
	カルヴァン	87
	宗教改革の帰結	89

<b>3</b>	宗教内乱期の政治思想	90
	迫害, 寛容, 抵抗権	90
	モナルコマキの諸相	91
	ポリティック派の寛容論	93
	ボダン	94

## 第5章 17世紀イングランドの政治思想 99

<b>1</b>	イングランド内乱	100
	イングランド内乱の展開	100
	レヴェラーズ	101
	ミルトン	103
	自由な国家	105
<b>2</b>	ホッブズ	106
	新しい政治学	106
	自然状態と自然法	108
	国家の成立	110
	宗教論と主権の限界	111
<b>3</b>	ハリントン	113
	「古代の知恵」	113
	軍隊と土地所有	115
	『オセアナ共和国』の制度構想	117
	ネオ・ハリントニアン	119
<b>4</b>	ロック	120
	自然法と人間の認識能力	120
	自然状態	122
	政治社会	123
	宗教論	126

## 第6章 18世紀の政治思想 127

<b>1</b>	モンテスキュー	128
	絶対王政への知的抵抗	128
	共和政, 君主政, 専制政	129
	イングランドの発見者	132
	商業社会	133
<b>2</b>	啓蒙思想	135
	新たな知の拠点とネットワーク	135
	啓蒙とは何か	136
	道徳哲学	138
	啓蒙と政治権力	140
<b>3</b>	スコットランド啓蒙	142
	合邦と社会変動	142
	カントリ派とコート派	143
	道	

**第7章** 米仏二つの革命 149

- 1** ルソー……………150  
『学問芸術論』 150 『人間不平等起源論』 151 『社会契約論』 154 残された問い 156
- 2** アメリカ独立と『ザ・フェデラリスト』……………157  
アメリカ独立革命 157 トマス・ペイン 158 ジェファソン 160 『ザ・フェデラリスト』 161
- 3** フランス革命とバーク……………164  
フランス革命の衝撃 164 『現代の不満の原因』 165  
議会・政党論 167 『フランス革命の省察』 168

**第8章** 19世紀の政治思想 171

- 1** ヘーゲル……………172  
フランス革命批判 172 外面的国家批判 174 市民社会 175 行政, 職業団体, 国家 177
- 2** トクヴィルとミル……………179  
フランス革命と自由主義の誕生 179 トクヴィル 180  
デモクラシー社会の危険性 182 J. S. ミル 183
- 3** 社会主義とマルクス……………186  
社会問題と社会主義 186 サン・シモンとフーリエ 188  
オーウェンとブルードン 189 マルクス 190

**結章** 20世紀の政治思想 193

デモクラシーの世紀 194 政治とは何か 196 自由主義の転換 198 政治思想の現在 200

読書案内 207  
引用・参考文献 213  
事項索引 223  
人名・書名索引 229

◆ 図表

表1-1 アリストテレスの六政体論 22

◆ *Key person*

- ① ソクラテス 10
- ② プラトン 12
- ③ アリストテレス 16
- ④ リウイウス 27
- ⑤ キケロ 33
- ⑥ パウロ 42
- ⑦ アウグスティヌス 46
- ⑧ ボエティウス 56
- ⑨ トマス・アキナス 66
- ⑩ ダンテ 74
- ⑪ マキアヴェリ 78
- ⑫ ルター 85
- ⑬ ボダン 95
- ⑭ ミルトン 104
- ⑮ ホッブズ 107
- ⑯ ハリントン 114

◆ *Keyword*

- ① 政治 4
- ② 国家 (republic) 13
- ③ デモクラシー 20
- ④ 帝国 30
- ⑤ 共和政 (republic) 34
- ⑥ 平等 43
- ⑦ 自由意志 50
- ⑧ 法の支配 58
- ⑨ 共通善 67
- ⑩ 代表制 72
- ⑪ 国家 (state) 80
- ⑫ 政教分離 86
- ⑬ 主権 96
- ⑭ 寛容 106
- ⑮ 安全 112
- ⑯ 共和主義 118

- |               |            |
|---------------|------------|
| ⑰ ロック 121     | ⑰ 所有権 125  |
| ⑱ モンテスキュー 130 | ⑱ 権力分立 133 |
| ⑲ ヴォルテール 139  | ⑲ 進歩 141   |
| ⑳ ヒューム 147    | ㉑ 利益 145   |
| ㉑ ルソー 152     | ㉒ 社会契約 155 |
| ㉒ ハミルトン 161   | ㉓ 多元主義 163 |
| ㉓ パーク 166     | ㉔ 保守主義 169 |
| ㉔ ヘーゲル 173    | ㉕ 市民社会 176 |
| ㉕ トクヴィル 181   | ㉖ 自由主義 185 |
| ㉖ マルクス 191    | ㉗ 社会主義 187 |

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

はまさにデモクラシーの発展と軌を一にするものであった。とはいえ、それが社会秩序を脅かすものであったことも間違いはない。ここにアテナイは空前の知的動揺期に突入するが、そこに現れたのがソクラテスであった。

## 2 プラトン

---

### 法は絶対か

ギリシア人は、この世界には何かしら神聖な秩序が存在すると考えていた。それゆえ、人は世界の秩序に合致した正義の下に生きるべきであり、彼らにとって、法に服従することは何ら自由に反することではなかった。にもかかわらず、ソフィストと呼ばれた知的革新者たちは、このような法すらも自明のものとはみなさなかった。

はたして法とは何であろうか。いかに神聖なものであるとしても、しょせん人の作ったものではないか。人の作ったものであるなら、絶対的なものではないはずだ。ソフィストはそうのように説いた。彼らの代表者とされるプロタゴラスは、「万物の尺度は人間である」といったが、いわば、すべては人次第であるというわけである。当然、時と場所が違えば、適用されるべき法も違ってくることになる。

しかしながら、ポリスにおける政治にとって重要だったのは、市民が人ではなく法に従って生きることであった。それも強制されるのではなく、自発的に法に従うことが肝心であった。そうだとすれば、法の根柢が危うくなることは、すべての秩序を揺るがしかねない事態である。永遠の秩序への関心をもったギリシア人であるが、法と永遠の秩序が無縁であるならば、どうして法に従う必要があるだろうか。



社会的な背景もあった。ペルシャ戦争では一致団結したギリシアであったが、やがてアテナイとスパルタの反目が目立つようになる。多くのポリスが両陣営に分かれて争ったペロポネソス戦争（前431-前404年）は、それぞれのポリスの内政にも暗い影を投げ掛けた。親アテナイ派と親スパルタ派とが交互に権力を奪い、そのたびに各ポリスの法は変更された。結果として、まさしく「すべては人次第」というべき事態に陥ったのである。

ソフォクレスによるギリシア悲劇『アンティゴネ』は、この点で象徴的である。主人公のアンティゴネは、悲劇的な終わりを迎えたオイディプス王の娘である。彼女の兄弟は王位を争った末に共に倒れたが、とくにその一人は、国法に反したとして葬られることもなく、屍<sup>しかばね</sup>を野にさらすことになる。

これに対しアンティゴネは、死んだ近親を埋葬するのは家族としての自然の情であると主張する。それが法に反するのなら、法の方がおかしい。敢然と兄を<sup>とむら</sup>弔ったアンティゴネは、そのことによって死ぬことになるが、国法の側に立った王クレオンもまた悲劇に見舞われる。国法と人間の自然の法の相克を鮮やかに描いたものであるといえよう。

### ソクラテスの登場

このような知的動揺期にソクラテスは現れた。ちなみに彼は1冊の著作も残しておらず、その言行は、以下に紹介するプラトンらによって伝えられているだけである。彼はただ自らの信じる<sup>①</sup>ところに従って生きたのであり、その人生をもって巨大な倫理革命を引き起こしたといえよう（<sup>②</sup>Key person ①）。

それにしても、ソクラテスはなぜそれほど影響力をもったのだろうか。彼はただデルフォイの神託に従い、真に知るとはどういうことかを、対話を通じて明らかにしようとしただけである。権力も

### **Key person** ① ソクラテス (前 470/69-前 399 年) ~~~~~

アテナイに生まれたソクラテスは、ペロポネソス戦争に従軍するなど、自らが良き市民であることを疑わなかった。にもかかわらず、その生涯はアテナイとの緊張感に満ちたものであった。彼はあるときデルフォイ神殿から「ソクラテス以上の賢者はいない」という神託を受ける。自分が無知であることを知るソクラテスは、この神託の謎を解くことを自らの天命とみなした。彼は当時の知識人とされた人々のところを訪れ対話を試みるが、賢いとされる人も実は何も知らないということに気づく。ここから彼は自らの無知を知ることの重要性を自覚した。このようなソクラテスの活動はアテナイの多くの若者の支持を集める一方で、有力者の反発を買い、「神を信じず、青年を墮落させる」として裁判にかけられた。そこで死刑判決を受けたソクラテスは、亡命を勧める友人クリトンの助言を退け、毒杯を仰ぐ。アテナイの良き市民としての自らの生涯の一貫性を尊んだためであった。

~~~~~

財力もないソクラテスは、まさに徒手空拳でポリスの秩序と向き合わざるをえなかった。彼の悲劇的な死は、そのことを如実に示している。

ソクラテスにとって、生きるとはただ生きることではなく、「よく生きる」ことを意味した。それでは、どうすれば「よく生きる」ことができるのだろうか。彼は自らの魂への配慮が何よりも重要であると説いた。

それでは魂とは何か。ソクラテスはいう。仮に権力者に迫害されて死ぬとしても、そのことで魂は傷つかない。しかしながら、自分に嘘をつくこと、自らの信念に反した行動をとることは、魂を損なう。肝心なのは不正を行わないことである。それゆえ、人に不正を加え、自分の魂を振り返ることのない独裁者ほど哀れなものはいない。

このようなソクラテスの主張は、それまでのギリシア人の価値観を百八十度転換させるものであった。というのも、ギリシア人にとって価値ある人生とは、仲間の市民の眼前で政治的・軍事的に活躍して、不朽の名声を後世に残すことであったからである。これに対しソクラテスは、社会的な成功や名声よりも、自らの内面の方が大切であると主張した。魂への配慮と比べれば、それらは無に等しいというわけである。

ソクラテスを批判する人からすれば、彼はソフィストの一人、最も悪質なソフィストであった。というのも、彼の考え方は、法に代表されるポリスの伝統的な価値観を否定する危険性を秘めていたからである。反面、ソクラテスはソフィストと違い、「すべては人次第」という相対主義者ではなかった。彼は魂への配慮という新たな価値を示したのであり、それまでの哲学者がもっぱら自然の中における不変の原理を探究したのに対し、人間の倫理における新たな原理を模索したのである。

しかしながら、ソクラテスは祖国であるアテナイによって、それもまさにアテナイのデモクラシーによって死に至る。このことの意味を追究したのが、弟子プラトンである。

### 『ゴルギアス』と 『国家』

自らが「よく生きる」ことをめざしたソクラテスは、なぜ死に追い込まれたのか。このことを自問したプラトンは、ポリス自体の改革に乗り出さなければならないという結論に達した。ソクラテス自身は政治にかかわらなかったが、彼の倫理的模索は最終的に既存の秩序と衝突せざるをえなかった。そうである以上、魂への配慮を可能にするような国家を新たに作り出すしか道はないと、プラトンは考えたのである。

プラトンはまず『ゴルギアス』（前380年ごろ）において弁論術を

## **Key person** ② プラトン (前 429-前 348 年) ~~~~~

アテナイの名門に生まれたプラトンは、若いころから政治への強い関心をもっていた。そんな彼に衝撃を与えたのが、師であるソクラテスの刑死である。プラトンはアテナイ政治の腐敗を見出し、以後、イタリアのシチリア島を訪問してピュタゴラス学派と交わるなど、旅を続けた。やがてアテナイに戻ったプラトンは自らの学園を創設し、アカデメイアと命名する。ソクラテスから学んだ対話形式を重んじたプラトンは、天文学や幾何学に始まり、哲学や政治学までをそこで教えた。プラトンは後に再びシチリアのシュラクサイに赴き、自らの考える哲人王の理想を実現しようと試みたが、失敗に終わっている。20世紀に活躍した哲学者ホワイトヘッドが「西洋哲学の歴史とは、プラトンへの膨大な注釈である」と評したように、プラトンの後世への影響は巨大であり、古代ローマ末期からルネサンス期にかけてのネオ・プラトニズムをはじめ、20世紀の思想にも強い刻印を残している。

~~~~~

検討する。すでに述べたように、ポリスでは市民間の説得が重要であったので、弁論術はそのために不可欠な能力であった。しかしながら、プラトンにいわせれば、そのような弁論術はしばしば人々を自分の思うように操作したいという欲望と結び付く。相手の魂を真に改善するよりはむしろ迎合し、つけ込もうとする点で、弁論術は真の政治術とはいえない。

本当に大切なのは、自らの欲望すらもコントロールすることではないか。そのような見地から、理想の国家論を展開したのが『国家(ポリテイア)』(前380年ごろ)である。本の副題は「正義について」であるが、プラトンは、魂にとっての正義を知るためには、より大きな対象であるポリスにおける正義を考えてみる必要があると説く。

プラトンの見るところ、ポリスを構成するのは二種類の人々である。一つは、快楽を追求する大多数の人々であり、経済活動に専念

## **Keyword ② 国家 (republic)** ~~~~~

本文でも記したように、プラトンの名著は『国家』と訳されている。とはいえ、この場合の国家とは、現代の私たちが理解している国家とは異質なものである。後に紹介するように (☞ **Keyword ①**)、現代語の国家は英語の state の翻訳であり、本来的には統治機構を意味する。これに対し、プラトンのいう国家とはギリシア語でいうポリテイアであり、むしろ市民たちの集合体を意味した。古代ギリシアにおいて、土地は国家の本質的要素とはみなされておらず、市民が他の場所へ移住する場合、国家もまた移動するとみなされた。ローマのキケロも、やはり国家を正義と共通善によって結ばれた市民の集まりと定義している。古代ギリシア語にいうポリスやポリテイア、さらにラテン語の res publica など、共通の紐帯によって結び付けられた市民の団体としての国家観こそが、古代ギリシアやローマにおける共通理解であったといえるだろう。

~~~~~

すべきである。もう一つは、これらの人々を守り、指導する守護者層である。守護者層についても、軍事をもっぱらにする補助者層と、政治に携わる真の守護者層とに分かれる。この三つの階層がそれぞれの任務を果たし、より上位の階層に従うことで正義が実現するとプラトンは考えた。

守護者層養成のために、素質の優れた人間を教育する必要があると考えたプラトンは、そのためのプログラムを考えるとともに、この階層に選ばれた人々は私有財産も家族ももってはならないとした。真に無私の人だけが政治にかかわるべきだと考えたのである。

このようなポリスのしくみを人間の魂に当てはめると、経済階層は欲望に、補助者層は気概に、そして真の守護者層は理知に該当する。ポリスの場合と同じように、欲望が気概、そして理知によく従うことで正義にかなった魂の状態が実現するとプラトンは考えた。

## ●事項索引●

### ◆ア行

アテナイ 4, 5, 7, 9  
 アナルコ・サンディカリズム（無政府主義的組合主義） 190  
 イギリス国制 168  
 違憲立法審査権 163  
 異端 89  
 一神教 39, 44  
 一般意志 140, 154, 173  
 アイデア 14, 17  
   善の—— 14  
 イングランド国制 101, 113, 132, 147  
 永遠 51, 141  
 英国教会 100  
 エタ・ジェネロー →三部会  
 エリート民主主義論 195  
 オイコス（家） 19  
 王権神授説 122  
 王政 14, 28, 66, 117, 133  
 オリエンタル・デスポティズム（東洋的専制） 132  
 恩寵 45, 50, 65, 85, 88

### ◆カ行

階級闘争 192  
 外交権 →連合権  
 格差原理 201  
 拡大する共和国 81  
 革命権 125  
 家族 175  
 寡頭政 14, 20, 28  
 カトリック教会 46, 55  
 カノッサの屈辱 60

家父長権 122  
 神  
   —の国 37, 47, 87  
   愛の—— 39  
   義の—— 39  
 慣習 96, 166, 169  
 カントリ派（地方派） 119, 143, 144, 158  
 寛容 89, 93, 106  
 官僚制 57, 94, 185  
 気概 13  
 議会（パーリアメント） 71, 100, 101, 167  
   —主権 101  
 貴族 4, 34, 128  
   —院 102, 129  
   —政 4, 28, 117, 133, 166  
   天性の—— 167  
 ギベリン党（皇帝派） 70, 77  
 救済 41  
 宮廷派 →コート派  
 教会 47, 59, 76, 84, 86, 89, 90  
   —大分裂 →シスマ  
   戦う—— 88  
 教皇 60, 69, 74  
   —至上権 60, 96  
   —派 →ゲルフ党  
 共産主義 192  
 行政 177  
 共通権力 110  
 共通善 37, 67  
 恐怖 80, 108  
   —政治 172, 179  
 共和主義（リパブリカニズム） 76, 118, 158

共和政 26, 35, 77, 82, 89, 115, 131, 157  
キリスト教 38, 42, 45, 59, 73, 83, 188  
——共同体 (Respubilica Christiana) 57, 69  
キリストの体 (corpus christi) 43  
近代 54  
——の知恵 113  
近代人の自由 180  
君主政 82, 115, 131, 166  
経験論 121  
啓蒙 135-137  
——専制君主 137, 140  
契約 39, 155  
ゲルフ党 (教皇派) 70, 77  
原罪 41  
原子論 68  
権力 37, 69, 71, 79, 109, 124, 133  
——分立 124, 133, 185  
元老院 26, 29, 34, 117, 133  
合意 123  
公会議運動 70  
皇帝派 →ギベリン党  
高等法院 128  
功利主義 183  
国制 (ポリテイア) 21  
国民国家 196  
個人主義 182  
古代 54  
——の知恵 113, 114  
古代人—近代人論争 128, 141  
古代人の自由 180  
国家 2, 34, 37, 47, 48, 66, 80, 90, 111, 112, 145, 169, 174, 191, 198  
自由な—— 105  
都市—— →ポリス  
領域—— 70  
国家強盗団説 47  
国家理性 (raison d'État) 81

コート派 (宮廷派) 119, 143, 144  
護民官 27  
コモン・センス 158  
コモン・ロー 58, 100  
混合王政 116, 118, 133  
——論 29, 115  
コンスル →執政官

## ◆ サ 行

産業革命 186  
三権分立 133, 160, 162  
三部会 (エタ・ジェネロー) 71  
自愛心 152  
シヰイック・ヒューマニズム →政治的  
人文主義)  
自己愛 15, 133  
事効説 47  
自己完成能力 153  
自己利益 139  
シスマ (教会大分裂) 69, 70, 83  
自然権 109, 155, 160  
自然状態 106, 109, 151  
自然法 (law of nature) 25, 33, 58, 66, 110, 121, 123  
自尊心 35  
自治 76, 160, 183  
執行権 124  
实在論 68  
執政官 (コンスル) 26, 29, 34, 133  
実践学 18  
私的判断 110  
自発的結社 183  
司法権 133  
市民 3, 82, 97, 156  
——権 29  
——社会 176, 191  
——宗教 156  
社会 83, 125, 128, 129, 145, 159, 169, 187  
社会契約論 6, 154, 155, 185

社会主義 187  
社会問題 186  
奢侈 118, 143, 144  
シャルトル学派 62  
自由 5, 35, 49, 50, 87, 93, 105, 141,  
151, 152, 174, 184, 198  
——意志 46, 48, 50  
消極的—— 198  
積極的—— 198  
宗教改革 83, 85, 86, 89  
宗教内乱 91  
衆愚政 28  
私有財産 13, 15  
修辭学 (レトリック) 33, 56, 76  
自由主義 (リベラリズム) 121, 184,  
199  
新—— 200  
習俗 150  
十二表法 27  
自由放任主義 188  
終末論 51  
主權 94, 111, 130  
受動的服従 42  
商業 134  
情念 18, 25, 146, 147, 151, 189  
常備軍 57, 94, 119, 144  
職業団体 177  
贖宥状 (免罪符) 84  
叙任権闘争 59  
庶民院 115, 129  
所有権 67, 120, 125, 148, 179, 184  
思慮 18  
神義論 48  
神權政治 78, 89  
信仰義認説 85  
人効説 46  
信託 120, 125  
人文主義 (ヒューマニズム) 76  
政治的—— (シヴィック・——)  
76

進歩 141  
人民協約 (An Agreement of the Peo-  
ple) 102  
真理 15  
人倫 174  
水平派 →レヴェラーズ  
スコットランド啓蒙 143, 145-147,  
176  
スコラ哲学 64  
ストア派 25, 33, 36, 37  
スパルタ 5, 9, 29, 81  
正義 6, 33, 37, 147, 201  
政教分離 86  
制作学 18  
政治 (politics) 2, 4, 25, 36, 44, 67,  
135, 196  
政治学 17, 77, 79, 108, 113, 114,  
128  
政治参加 15, 24, 30, 185, 195  
政治社会 (civil or political society)  
114, 124  
政治的なるもの 197  
政体論 21  
政党 168  
政府 125, 148, 156, 159  
セクト型 101  
絶対王権 94  
善悪 50, 108  
——二元論 48, 49  
選挙 20  
僧主政 14, 28  
専制政 131  
戦争状態 106  
全体意志 154  
全体主義 194  
先入見 169  
千年王国論 51  
ソフィスト 7, 8  
ソラ・フィデア (信仰のみ) 85



## ◆ 夕 行

大学 61  
 代議制 159  
 大権 (prerogative) 58  
 大憲章 →マグナ・カルタ  
 代表 72  
 代表制 156  
 多数者の暴政 180  
 魂への配慮 10  
 地方派 →カントリ派  
 中間団体 165  
 中世 54, 70  
 長老派 101  
 抵抗権 59, 67, 90, 125  
 帝国 2, 30, 70, 202  
   ローマ—— 31  
 帝政 32, 35, 196  
 適法性 172  
 哲学 6, 24, 64, 135, 138  
   道德—— 146  
 哲人王 14  
 デモクラシー (民主政) 5-7, 14, 20,  
   24, 28, 30, 35, 72, 117, 133, 167,  
   181-183, 194-196  
 道徳性 174  
 党派 26, 148, 163, 168  
 東洋的専制 →オリエンタル・デスポテ  
   イズム  
 徳 20, 79, 131, 150, 162  
 特殊意志 140  
 独立宣言 160  
 独立派 101  
 土地所有 115, 143  
 特権 (privilege) 58  
 トーリー 120  
 奴隷 4, 25, 43, 105  
   ——契約 154

## ◆ ナ 行

ナントの勅令 95  
 二院制 27, 117  
 ネオ・ハリントニアン 119, 143

## ◆ ハ 行

バビロン捕囚 69, 70  
 パーリアメント →議会  
 万人司祭主義 86  
 万人の万人に対する闘争 106  
 比較 153  
 悲劇 9  
   ギリシア—— 6  
 必要悪 48  
 ヒューマニズム →人文主義  
 ビューリタン 100  
 平等 43, 109, 152, 182  
 福祉国家 199  
 不死 51  
 腐敗 104, 119, 144, 158  
 普遍論争 68  
 フランス革命 164-166, 169-171,  
   172  
 ブルジョワ 151  
 文芸共和国 (République des lettres)  
   136  
 文明社会 134, 187  
 平民 4, 7  
 ペラギウス派 45  
 ヘレニズム 24  
 弁証法 175  
 弁論術 11  
 ホイッグ 120  
 法 6, 33, 37, 59, 129, 130, 156  
   ——の支配 58, 66, 96  
 暴君放伐論 63  
 封建制 57  
 法治主義 58  
 法服貴族 128

保守主義 165,169  
ポリアーキー 195  
ポリス (都市国家) 2,24,70,180  
——的動物 4,19,65  
ポリテイア →国制  
ポリティーク派 93

### ◆ マ 行

マグナ・カルタ (大憲章) 100  
民会 3,29,34,117,133  
民衆裁判 5  
民主政 →デモクラシー  
民主的専制 180  
民兵 144  
無政府主義的組合主義 →アナルコ・サ  
ンディカリズム  
名誉 131  
免罪符 →贖宥状  
目的論 16  
モナルコマキ 91

### ◆ ヤ 行

唯名論 68  
ユグノー 91  
ユダヤ教 38-42  
欲望 12  
予定説 88

### ◆ ラ 行

利益 81,131,145,148,162

利己心 153  
理神論 139  
理性 14,18,33,65,121,137,147,  
164,174  
理知 13-15  
立憲主義 91,103,133  
立法権 124  
立法者 156  
律法主義 39  
リパブリカニズム →共和主義  
リベラリズム →自由主義  
両剣論 59  
良心 93,112  
理論学 17  
隣人愛 40,43,87  
ルネサンス 36,61  
カロリング・—— 56  
12世紀—— 56,61  
レヴェラーズ (水平派) 102  
レース・プブリカ (res publica) 13,  
34,67,118  
レトリック →修辞学  
連合規約 161  
連合権 (外交権) 124  
憐憫の情 152  
連邦制 163  
労働 123,176,189,192,196  
ローマ教皇 55,96  
ローマ法 35,57,62,71

●人名・書名索引●

◆ア行

アウグスティヌス (Augustinus)  
 45-50, 85  
 『神の国 (*De civitate Dei*)』 46, 47  
 『告白 (*Confessiones*)』 45, 46  
 『自由意志について (*De libero arbitrio*)』 49  
 アウグストゥス (Augustus) 27, 35  
 アクィナス, トマス (Thomas Aquinas)  
 65-67, 73, 85  
 『神学大全 (*Summa theologiae*)』  
 65  
 アブラハム (Abraham) 38  
 アリストテレス (Aristotelés) 4,  
 16-22, 29, 37, 43, 62, 64-67, 80, 96,  
 96, 108, 118, 145  
 『政治学 (*Politica*)』 19  
 『ニコマコス倫理学 (*Ethica Nicomachea*)』 17  
 アルチュセール, ルイ (Louis Althusser)  
 200  
 アルトジウス, ヨハネス (Johannes  
 Althusius) 163  
 アレクサンドロス大王 (Alexandros)  
 16  
 アーレント, ハンナ (Hannah Arendt)  
 4, 196, 197  
 『全体主義の起源 (*The Origins of  
 Totalitarianism*)』  
 『人間の条件 (*The Human Condi-  
 tion*)』 197  
 アンリ 4 世 (Henri IV) 93  
 イエス (Jesus) 39-43, 60  
 インノケンティウス 3 世 (Innocentius

III) 60  
 ウィクリフ, ジョン (John Wycliffe)  
 83  
 ウィリアム (オッカムの) (William of  
 Occam) 68, 69  
 ウィリアム 3 世 (William III) 142  
 ヴェルギリウス (Vergilius Maro Pub-  
 lius) 74  
 ヴォルテール (Voltaire) 106,  
 138-140  
 『寛容書簡 (*Traité sur la tolérance*)』  
 139  
 『哲学書簡 (*Lettres philosophiques*)』  
 138  
 ウォルポール, ロバート (Robert Wal-  
 pole) 143  
 エピクロス (Epikouros) 25  
 エラスムス (Desiderius Erasmus)  
 89  
 エリザベス 1 世 (Elizabeth I) 100  
 エルヴェシウス, クロード=アドリアン  
 (Claude Adrien Helvétius) 139,  
 140  
 エンゲルス, フリードリヒ (Friedrich  
 Engels) 187, 190  
 『共産党宣言 (共産主義者宣言)  
 (*Manifest der Kommunistischen  
 Partei*)』 (マルクスとの共著)  
 191  
 オーウェン, ロバート (Robert Owen)  
 189, 190  
 オクタウィアヌス (Gaius Octavianus)  
 32  
 オマン, フランソワ (François Hotman)  
 91, 92

『フランコ・ガリア (Franco-Gallia)』

91

### ◆カ行

- カエサル, ユリウス (Caesar) 32, 114
- カステリオン (カステリヨ), セバステイアン (Sébastien Castellion) 89
- ガリレイ, ガリレオ (Galileo Galilei) 107
- カルヴァン, ジャン (Jean Calvin) 87-90, 92, 104
- 『キリスト教綱要 (Christianae religionis Institutio)』 87
- カール大帝 [シャルルマーニュ] (Karl I; Charlemagne) 55
- カール・マルテル (Karl Martel) 55
- カント, イマヌエル (Immanuel Kant) 136-138, 147, 174, 175, 177, 198
- 『啓蒙とは何か (Was ist Aufklärung?)』 136
- キケロ, マルクス・トゥッリウス (Marcus Tullius Cicero) 13, 32-36, 48, 62, 67, 80, 118, 145
- 『義務について (De officiis)』 33
- 『国家について (De re publica)』 32, 33
- 『法律について (De Legibus)』 33
- ギールケ, オットー (Otto Friedrich von Guericke) 163
- グラックス兄弟 (Tiberius Gracchus/Gaius Gracchus) 31
- クリトン (Criton) 10
- クレイステネス (Kleisthenes) 5
- グレゴリウス7世 (Gregorius VII) 60
- グロティウス, フーゴー (Hugo Grotius) 151, 155
- クロムウェル, オリバー (Oliver Cromwell) 101, 103, 104, 117
- ケインズ, ジョン・メイナード (J. M.

Keynes) 199

ゲラシウス1世 (Gelasius I) 59

コンスタン, バンジャマン (Henri-Benjamin Constant de Rebecque) 179, 180, 198

コンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat Condorcet) 136, 141

『人間精神進歩史 (Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain)』 141

### ◆サ行

- サヴォナローラ (Girolamo Savonarola) 78
- サン・シモン (Claude Henri de Rouvroy Saint-Simon) 188, 189
- 『新キリスト教 (Le Nouveau Christianisme)』 188
- サンデル, マイケル (Michael J. Sandel) 67, 202
- ジェイ, ジョン (John Jay) 161, 162
- 『ザ・フェデラリスト (The Federalist)』 (ハミルトン, マディソンとの共著) 162, 163
- ジェファソン, トマス (Thomas Jefferson) 158-160
- 『独立宣言 (The Declaration of Independence)』 158
- ジェームズ2世/7世 (James II/VII) 120
- シェリング, フリードリヒ (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling) 172
- シドニー, アルジャノン (Algernon Sydney) 119
- ジャクソン, アンドリユー (Andrew Jackson) 180
- シャフツベリ伯 (Earl of Shaftsbury = Anthony Ashley Cooper) 120, 121

シャルル 8 世 (Charles VIII) 78  
 シュミット, カール (Carl Schmitt)  
   96, 196, 197  
   『政治神学 (*Politische Theologie*)』  
   96  
   『政治的なものの概念 (*Der Begriff des  
   Politischen*)』 190  
 シュンペーター, ヨーゼフ (J. A. Schumpeter) 195  
 小スキピオ (Publius Cornelius Scipio) 28  
 ジョージ 3 世 (George III) 165, 166  
 ジョン (ソールズベリーの) (John of Salisbury) 63, 71  
   『ポリクラティクス (*Policraticus*)』  
   63  
 スコトゥス, ドゥンス (Johannes Duns Scotus) 68  
 スチュアート, ジェームズ (James Stuart) 142  
 スミス, アダム (Adam Smith) 134,  
   142, 145-147, 199  
   『諸国民の富 (*An Inquiry into the  
   Nature and Causes of the Wealth of  
   Nations*)』 146  
   『道徳感情論 (*The thory of moral  
   sentiments*)』 146  
 セネカ (Seneca) 36, 37  
   『生の短さについて (*On the Shortness  
   of Life*)』 37  
   『心の平静について (*De tranquillitate  
   animi*)』 37  
 ゼノン (Zēnōn) 25  
 セルヴェ, ミシェル (ミカエル・セルヴェ  
   トウス, Michel Servet) 89  
 ソクラテス (Sōkratēs) 8-11, 16, 22,  
   39  
 ソフォクレス (Sophoklēs) 9  
   『アンティゴネ (*Antigone*)』 9  
 ソロン (Solōn) 4, 156

## ◆ タ 行

ダ・ヴィンチ, レオナルド (Leonardo da Vinci) 77  
 タキトゥス (Tacitus) 35, 36, 92  
   『ゲルマニア (*Germania*)』 35, 92  
   『同時代史 (*Historiae*)』 35  
   『年代記 (*Annales*)』 35  
 ダランベール, ジャン・ル・ロン (Jean Le Rond d'Alembert) 139  
 タルクィニウス・スペルプス (Lucius Tarquinius Superbus) 26  
 ダール, ロバート (Robert A. Dahl) 195, 196  
 ダレイオス 1 世 (Dareios I) 5  
 ダンテ (Alighieri Dante) 73, 74  
   『神曲 (*Divina commedia*)』 73, 74  
   『帝政論 (*De monarchia*)』 73, 74  
 チャールズ 1 世 (Charles I) 100,  
   101, 103, 114  
 チャールズ 2 世 (Charles II) 103,  
   114, 119-121  
 デイオゲネス (Diogenēs) 24  
 デイドロ, ドニ (Denis Diderot) 37,  
   139-141, 152  
   『百科全書 (*Encyclopédie*)』 140,  
   152  
 テイラー, チャールズ (Charles Taylor) 202  
 テオドリック王 (Theodoric) 56  
 デカルト, ルネ (René Descartes) 107, 138  
 トウキユデイデス (Thucydides) 107  
   『戦史 (*Historia*)』 6, 107  
 トクヴィル, アレクシ・ド (Alexis de Tocqueville) 180-184  
   『アメリカのデモクラシー (*De la  
   Démocratie en Amérique*)』  
   180

『旧体制と大革命 (De l'ancien régime et al Révolution)』 181

ドルバック (Paul-Henri Thiry Baron d' Holbach) 138

### ◆ ナ 行

ナポレオン (Napoléon Bonaparte)

173, 179

ナポレオン 3 世 (Napoléon III) 181,

191

ニュートン, アイザック (Isaac Newton)

138

ネヴィル, ヘンリー (Henry Neville)

119

ネグリ, アントニオ (Antonio Negri)

202

『帝国 (Empire)』 (ハートとの共著)

202

ノージック, ロバート (R. Nozick)

201

『アナーキー・国家・ユートピア (Anarchy, State, and Utopia)』

201

ノストラダムス (Nostradamus) 95

ノックス, ジョン (John Knox) 90

### ◆ ハ 行

ハイエク, フリードリヒ (F. A. von

Hayek) 199, 200

ハインリヒ 4 世 (Heinrich IV) 60

パウロ (Paulus) 41-43, 45

パーカー, ヘンリー (Henry Parker)

101

パーカー, アーネスト (Ernest Barker)

163

バーク, エドマンド (Edmund Burke)

159, 165-170, 172

『現代の不満の原因 (Thoughts on the present discontents)』 166

『崇高と美の観念の起源 (A Philo-

sophical enquiry into the origine of our ideas of the sublime and beautiful)』 166

『フランス革命の省察 (Reflections on the Revolution in France)』 166

パスカル, ブレーズ (Blaise Pascal)

138

ハチスン, フランシス (Francis Hutcheson) 142

ハート, マイケル (Michael Hardt)

202

『帝国 (Empire)』 (ネグリとの共著)

202

ハミルトン, アレクサンダー (Alexander Hamilton) 161, 162

『ザ・フェデラリスト』 (The Federalist) (ジェイ, マディソンとの共著)

162, 163

バーリン, アイザイア (Isaiah Berlin)

198

ハリントン, ジェームズ (James Har [r] ington) 113-119

『オセアナ共和国 (The Commonwealth of Oceana)』 113

ハンニバル (Hannibal) 28

ヒューム, デイヴィッド (David Hume)

118, 125, 142, 146-148, 150, 152, 168, 199

『イングランド史 (The history of England)』 147

ファーガソン, アダム (Adam Ferguson)

142

フィルマー, ロバート (Robert Filmer)

122, 123

フーコー, ミッシェル (Michel Foucault)

200

『監獄の誕生 (Surveiller et Punir: Naissance de la Prison)』 200

フス, ヤン (Jan Hus) 83

ブーフエンドルフ, ザミュエル・フォン

(Samuel Pufendorf) 155  
 プラトン (Platōn) 9, 11-19, 21, 22,  
 48, 56, 62, 96  
 『国家 (Politeia)』 12  
 『ゴルギアス (Gorgias)』 11, 13,  
 15  
 フーリエ, シャルル (François Marie  
 Charles Fourier) 188, 189  
 ブルクハルト, ヤーコブ (Jakob Burckhardt) 61  
 ブルートゥス (Marcus Junius Brutus)  
 32  
 ブルードン, ピエール・ジョセフ  
 (Pierre-Joseph Proudhon) 190  
 『所有とは何か (Qu'est-ce que la propriété)』 190  
 プロタゴラス (Protagoras) 8  
 フンボルト, ヴィルヘルム・フォン (Karl  
 Wilhelm Humboldt) 184  
 ベイコン, フランシス (Francis Bacon)  
 107, 108  
 ペイン, トマス (Thomas Paine) 158,  
 159  
 『コモン・センス (Common Sense)』  
 158  
 『人間の権利 (Rights of man)』 159  
 ヘーゲル, G. W. F. (Georg Wilhelm  
 Friedrich Hegel) 172-178, 191  
 『エンチクロペデー (Enzyklopädie  
 der philosophischen Wissenschaften)』 173  
 『精神現象学 (Phänomenologie des  
 Geistes)』 173, 176  
 『大論理学 (Wissenschaft der Logik)』  
 173  
 『哲学史講義 (Vorlesungen über die  
 Geschichte der Philosophie)』  
 173  
 『ドイツ憲法論 (Die Verfassung  
 Deutschlands)』 172

『法の哲学 (Grundlinien der Philosophie des Rechts)』 173  
 『歴史哲学講義 (Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte)』  
 173  
 ベーズ, テオドール・ド (Théodore de Bèze) 92  
 『臣民に対する為政者の権利について (De jure magistratum in subditos)』 92  
 ペテロ (Peter) 60  
 ペトラルカ (Francesco Petrarca)  
 33  
 ペリクレス (Periklēs) 5  
 ベンサム, ジェレミー (Bentham  
 Jeremy) 140, 184  
 ヘンリー 8 世 (Henry VIII) 100, 116  
 ボエティウス (Anicius Manlius Torquatus Severinus Boethius) 51, 56  
 『哲学の慰め (De consolation philosophiae)』 51, 56  
 ボダン, ジャン (Jean Bodin) 94-97,  
 163  
 『国家論 (Les Six Livres de la République)』 94  
 ホブズ, トマス (Thomas Hobbes)  
 29, 105-113, 115, 116, 123, 125,  
 129, 140, 148, 151, 155  
 『市民論 (De cive)』 1642 107, 108,  
 112  
 『人間論 (De homine)』 108  
 『物体論 (De corpore)』 108  
 『法の原理 (Elements of Law)』  
 107  
 『リヴァイアサン (Leviathan)』 1651  
 107, 110-113  
 ホメロス (Homēros) 2  
 『イリアス (Ilias)』 2  
 『オデュッセイア (Odysseia)』 3  
 ポリュビオス (Polybios) 28, 29, 33,

34, 117, 118, 133  
『歴史 (Historia)』 28  
ボルジア, チェーザレ (Cesare Borgia)  
78  
ホワイトヘッド (Alfred North White-  
head) 12

### ◆ マ 行

マキアヴェリ, ニッコロ (Niccolò di  
Machiavelli) 26, 27, 77-82, 95, 97,  
105, 114  
『君主論 (Il Principe)』 79, 80, 82  
『リウウィウス論 (『ディスコルシ』,  
*Discorsi sopra la prima deca di Tito  
Livio*)』 27, 78, 81, 82, 105  
マタイ (Matthaios) 39  
マディソン, ジェームズ (James Madi-  
son) 161, 162  
『ザ・フェデラリスト (The Federal-  
ist)』 (ジェイ, ハミルトンとの共著)  
162, 163  
マリウス (Gaius Marius) 31  
マルクス, カール (Karl Marx) 187,  
190-192  
『共産党宣言 (共産主義者宣言)  
(*Manifest der Kommunistischen  
Partei*)』 (エンゲルスとの共著)  
191  
『資本論 (Das Kapital)』 191  
『ドイツ・イデオロギー (Die deutsche  
Ideologie)』 191  
『フランスの内乱 (Der Bürgerkrieg in  
Frankreich)』 1871 191  
『レイ・ボナパルトのブリュメール 18  
日 (Der achtzehnte Brumaire des  
Louis Bonaparte)』 191  
マルコ (Markov) 39  
マルシリウス (パドヴァの) (Marsilius  
of Padua) 73, 74  
『平和の擁護者 (Defensor pacis)』

73  
マンデヴィル, バーナード (Bernard de  
Mandeville) 144, 145  
『蜂の寓話——私人の悪徳すなわち公  
益 (The Fable of the Bees: or,  
Private Vices, Publick Benefits)』  
144  
ミケランジェロ (Michelangelo /Miche-  
lagniole Buonarroti) 77  
ミシュレ, ジュール (Jules Michelet)  
61  
ミラー, ジョン (John Millar) 142  
ミル, ジェームズ (James Mill) 183  
ミル, ジョン・スチュアート (John  
Stuart Mill) 183-186  
『経済学原理 (Principles of Political  
Economy, with some of their Ap-  
plications to Social Philosophy)』  
185  
『自由論 (On Liberty)』 183, 184  
ミルトン, ジョン (John Milton)  
103-106  
『アレオパジティカ (Areopagitica)』  
104  
『失樂園 (Paradise Lost)』 104  
メトリ, ジュリアン・オフレ・ド・ラ  
(Julien Offray de La Mettrie) 138  
モーセ (Mōseh) 38, 114  
モルネ, フィリップ・デュ・プレシ  
(Philippe du Plessis Mornay) 92  
『反暴君論 (Vindiciae contra tyran-  
nos)』 (ランゲとの共著) 92  
モンテスキュー (Charles Louis de  
Secondat Montesquieu) 26,  
128-134, 147, 163  
『ベルシヤ人の手紙 (Lettres per-  
sanes)』 128  
『法の精神 (De l'Esprit des lois)』  
129, 130  
『ローマ人盛衰原因論 (Considéra-



*tions sur les causes de la grandeur  
des Romains et de leur décadence)*』  
129, 130

モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne) 37, 95  
『エッセー (Essais)』 95

### ◆ ヤ 行

ヤコブ (Jacob) 38  
ユゴー, ヴィクトル (Victor Hugo)  
186  
『レ・ミゼラブル (Les misérable)』  
186  
ヨハネ (John) 39

### ◆ ラ 行

ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) 68  
ラスキ, ハロルド (Harold Joseph Laski)  
163  
ランゲ, ユベール (Hubert Languet)  
92  
『反暴君論 (Vindiciae contra tyrannos)』 (モルネとの共著) 92  
リウイウス, テイトゥス (Titus Livius)  
26-28, 105  
『ローマ建国史 (Ab urbe condita)』  
26  
リュクルゴス (Lykourgos) 156  
ルカ (Luke) 39  
ルソー, ジャン=ジャック (Jean-Jacques Rousseau) 136, 141, 147,  
150-157, 165, 173, 174, 176, 179,

180

『学問芸術論 (Discours sur les science  
et les arts)』 136, 150, 152  
『告白 (Les Confessions)』 152  
『社会契約論 (Du Contrat social)』  
154

『人間不平等起源論 (Discours sur l'  
origine et les fondements de l'inégalité  
parmi les hommes)』 151

ルター, マルティン (Martin Luther)  
46, 83-89

『キリスト者の自由 (Von der freiheit  
eines Christmenschen)』 87

ロック, ジョン (John Locke) 106,  
121-126, 129, 132, 138-140, 148,  
151, 158, 185

『教育論 (Some thoughts concerning  
education)』 121

『人間知性論 (An Essay concerning  
Human Understanding)』 121

『統治二論 (Two Treaties of Govern-  
ment)』 120, 122

ロピタル, ミシェル・ド (Michel de l'  
Hospital) 93

ロムルス (Romulus) 26

ロールズ, ジョン (John Rawls) 201

### ◆ ワ 行

ワシントン, ジョージ (George  
Washington) 161

ワーズワース, ウィリアム (William  
Wordsworth) 184

〈著者紹介〉

宇野重規 (うの しげき)

1967年、東京都生まれ。

1996年、東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了、博士(法学)。

現在、東京大学社会科学研究所教授。

専門は、政治思想史、政治哲学。

主な著書に、『デモクラシーを生きる——トクヴィルにおける政治の再発見』(創文社、1998年)、『政治哲学へ——現代フランスとの対話』(東京大学出版会、2004年、渋沢・クローデル賞レイ・ヴィトン・ジャパン特別賞受賞)、『トクヴィル 平等と不平等の理論家』(講談社選書メチエ、2007年、サントリー学芸賞受賞)、『(私)時代のデモクラシー』(岩波新書、2010年)、『民主主義のつくり方』(筑摩選書、2013年)、ほか。

せいようせいじ しそうし  
西洋政治思想史

*A History of Western Political Thought*

ARMA



有斐閣アルマ

2013年10月20日 初版第1刷発行

2016年5月30日 初版第4刷発行

著 者 宇 野 重 規

発 行 者 江 草 貞 治

発 行 所 株 式 有 斐 閣  
会 社

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町2-17

電話 (03)3264-1315 [編集]

(03)3265-6811 [営業]

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・精文堂印刷株式会社／製本・大口製本印刷株式会社

© 2013, Shigeki Uno. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-22001-0

**JCOPY** 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@copy.or.jp)の許諾を得てください。